

令和 6 年 5 月 1 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K12127

研究課題名（和文）日本の基礎看護教育における倫理的感受性育成プログラム開発 アジア諸国の比較研究

研究課題名（英文）Development of an Ethical Sensitivity Development Program in Japanese Basic Nursing Education

研究代表者

田中 真木（Tanaka, Maki）

名古屋大学・医学系研究科（保健）・講師

研究者番号：00405127

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、身体抑制という倫理的課題を通し、看護学生がそれをどのように捉えたのかを明らかにすることで倫理的感受性育成プログラムの開発のための理論基盤を構築することであり、研究段階は全3段階で構成された。看護学生へのインタビューをナラティブ分析により分析した結果、看護学生は、患者、抑制、自分、看護師、家族、他学生を対象とした問いを発生し、4年間を通して問いが展開されていた。展開として、問いの編集から編集後の捉えを経て帰着、問いの編集を経て帰着、問いが生まれない場合、展開なしという構造がみられた。また、問いの展開の各要素で、看護学生の二極化する思考が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

身体抑制という明確な価値の対立とそこに潜在する倫理的課題に焦点をあて、看護実践の前提である問いと問いを明らかにするための思考や行動をどのように展開するのかという倫理的思考モデルは、看護学生が学士課程を通して倫理的課題を思考し、行動する過程に新しい知見を得ることができ、臨地実習における倫理教育への具体的なアプローチ方法の視点、及び看護学生の倫理的能力の向上に向けた学習プログラム構築を検討するための基礎資料となる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify how nursing students perceived the ethical issue of physical restraint through the ethical issue of physical restraint. The results showed that the nursing students developed questions about the patient, restraint, themselves, nurses, family members, and other students, and that the questions were developed throughout the four years of the study. The structure of the development was as follows: from the editing of the question, through the post-editing capture and return, through the editing of the question and return, and when no question was generated, no development was observed. In addition, the polarized thinking of nursing students was evident in each element of question development.

研究分野：看護教育

キーワード：看護学生 倫理的感受性 看護教育 倫理的課題

1. 研究開始当初の背景

看護にとって倫理観の高い看護師の育成は世界共通の課題でありながらも、看護基礎教育における看護倫理教育の内容と教育モジュールに関してコンセンサスは存在しない現状がある。ナイチンゲールから始まる看護倫理教育の歴史は、その後全世界に広がり、各国の研究者や教育者によって実践され、看護学生ひいてはその対象となる患者へ受け継がれる。看護基礎教育における看護倫理教育は臨床における患者ケアに直結する重要な視点となる。

現代における看護は、「看護師として何をなすべきか?」と、「今の医療にふさわしい、よい看護師とは?」という倫理上の問いがきわめて重要であり、この2つを区別して探求する事は、看護倫理の理論的発展のために必要不可欠な視点といわれている。このうち、「何をなすべきか?」という問いは、倫理的課題への対処行動をとる際の自分自身への問いかけである。つまり、臨床で遭遇した倫理的課題に対する看護学生の対処行動は、その学生の持つ倫理観を映し出す鏡とも言えよう。看護学生が実習で遭遇する倫理問題から倫理観を特定し類型化することができれば、看護倫理教育の課題および倫理的視点を育むための具体的な方法論を示す。また、そこから倫理的感受性モデルを構築し、理論的基盤とすることで、倫理的感受性育成プログラムの開発を可能にすることが期待できる。

2. 研究の目的

本研究では、看護学生が臨地実習で遭遇する倫理的課題、身体抑制に焦点をあて、そこから得られる問いとその展開はどのように行われるのかを4年間の学士課程を通じた看護学生の経験から明らかにすることを目的とする。看護実践の始まりとしての問いは何かについて、身体抑制への遭遇を基点とし、その問いの展開がどのような思考や行動をもとに繰り広げているのかを卒業時までの経験から明確にすることで、臨地実習期間だけでなく学士課程において、看護学生が倫理的課題を思考し、行動する過程に新しい知見を得ることができる。これにより、臨地実習において倫理的課題に遭遇した看護学生に対し、教員や臨地実習指導者の具体的なアプローチ方法の視点を獲得だけでなく、4年間の学士課程における看護学生の倫理的能力の向上に向けた教育方法を検討するための基礎資料となる。そこから構築された倫理的感受性モデルを概念構築し、理論基盤とした倫理的感受性教育プログラムの理論的根拠を得る。

3. 研究の方法

本研究の主眼は、身体抑制という倫理的課題を通じ、看護学生がそれをどのように捉えたのかを明らかにすることで倫理的感受性育成プログラムの開発のための理論基盤を構築することであり、研究段階は3段階(第1段階: Scoping Review、第2段階: 質的データの検証による次段階の研究手法の検討、第3段階: 看護学生の倫理的課題への思考モデルの構築)で構成された。

4. 研究の成果

(1) 第1段階(Scoping Review): これまでの予備研究において、本研究における倫理的課題に、身体抑制を選択した根拠を明確化し、問いの編集における具体的内容はどのようなものかを明確にする目的の元、臨地実習で看護学生は何を倫理的課題として捉えているのか、その対処行動はどのようなものかを明らかにした。そこで倫理教育へのScoping reviewを行った。身体抑制などの倫理的課題に対し、思考や行動する基盤となる知識や技術を得るために、どのような倫理教育が行われているのかを明らかにし、問いや問いの編集ひいては展開に至るまで、どのように介入の効果を評価しているのか、それは評価し得るものなのか、を検討した。15文献から13の倫理教育方法が明らかとなり、テーマ別にみると Combining Web and lecture、

Use the Web for self-study、Simulation、Group learning、Analysis method educationの5つに大別できた。文献の多くがQuasi experimental studyを用いており、介入群においては、これら教育介入によって、評価項目の得点数に差がみられる。しかしながら、一時的な倫理教育介入により、対象集団の傾向は明らかになるが、その人(看護学生)の経験は測定できない。得点の示すものは集団の傾向であり、個人が臨地実習で倫理的課題に向き合う際、何を思い、意思決定し、行動するのは尺度得点や介入前後の有意差から示すことはできない。よって、学内における倫理教育で教授された内容が、臨地実習の場においてどのように看護学生の思考や行動に現れるのか、本研究でいう問いと問いの展開について明確な探求が求められることがわかった。そのためには、その人(ここでは看護学生)に焦点をあて、実習における患者に関する倫理的課題(ここでは身体抑制)への経験を明らかにする必要がある。そこで、問いの編集の中から、学内で教授された知識、技術が、編集にどのように関連しているのかについて明らかになると考え、経験からテーマを探求する必要性が示唆された。

(2) 第2段階(次段階における研究手法の検討): Scoping reviewの結果から、対象の経験に焦点化する必要性が明らかとなり、そこから、対象者の経験からどのように問いや問いの編集を抽出すべきかという研究手法の検討を行った。現象学的手法を用い、長い闘病の軌跡を持つがん患者の期待するよい看護師とは何かを探求した。患者たちは、ある看護師を「よい」と認識した根拠として、自身の心身両面での脆弱性を述べていた。その脆弱性をポジティブな方向へ転換させてくれる看護師が、患者たちにとってのよい看護師であった。ナラティブをデータとして、看護学生の問いの展開における構造を明らかにするためには、どのような分析手法が

妥当かを目的に、がん患者のナラティブを分析する中で検討した。これより、対象者の語る経験の文脈に焦点をあてる必要性が示された。

(3) 第3段階(看護学生の倫理的課題への思考モデルの構築): 看護学士課程における看護学生が学部3年生から4年生で行う臨地実習で遭遇した身体抑制からの問いとその展開について、看護学生の語りを記述することで、看護学生の倫理的課題における思考や行動の新しい知見を得ることを目指した。ケアや看護実践の始まりである問いに着目し、学部3年生から4年生の臨地実習で遭遇した身体抑制を基点とし、看護学生がどのような問いを持ち、それを学士課程4年間のどのような経験をもとに展開してゆくのかを検討した。第2段階の結果より、本研究のデザインは、ナラティブ分析を用いた質的記述的研究とした。

調査期間: 2022年3月1日から同年3月31日であった。データ収集に先立ち、研究者の所属する機関の研究倫理審査を受けた(倫理審査承認番号: 20-A079)。研究対象者へ強制力はたらないよう、研究者が教員として勤務する大学の学生、卒業生は研究対象者から除外した。機縁法を用い、研究対象者は2021年3月に看護学士課程を卒業する卒業予定者16名とし、インタビューガイドを使用したオンラインによる半構成的面接法を行った。分析手法は、ナラティブ分析におけるテーマ分析と構造分析とした(Riessman, 2008/2014)。

研究結果: 問いのテーマ分析では、看護学生が実習で身体抑制に遭遇した際の問いの結果が示された。全16事例中、62の問いがあり、その対象は患者、抑制、自分、看護師、家族、他学生に分けられ、問いは【患者はなぜ抑制されているのか】、【患者の様子はどうか】、【患者は不快ではないだろうか】、【患者は抑制をどこまで理解しているのか】、【このような抑制法があるのか】、【抑制をする判断基準とは何か】、【抑制を外す判断基準とは何か】、【患者の抑制を外すにはどうすればよいか】、【抑制を考える上での安全、自由とは何か】、【自分は何をすべきだろうか】、【嫌だな、怖いな、かわいそうだな等】、【自分は今後どう思考や行動すべきだろうか】、【看護師はなぜこのような行動をとるのだろうか】、【家族は抑制についてどう思っているのか】、【他学生は抑制についてどう思っているのか】の15のテーマがあった(表1)。

表1. 問いのテーマと対象

問いのテーマ (問いの数)	問いの対象 (問いの数)
患者はなぜ抑制されているのか (13)	
患者の様子はどうか (4)	患者 (28)
患者は不快ではないだろうか (7)	
患者は抑制をどこまで理解しているのか (4)	
このような抑制法があるのか (2)	
抑制をする判断基準は何か (4)	
抑制を外す判断基準とは何か (3)	抑制 (18)
患者の抑制を外すにはどうすればよいか (7)	
抑制を考える上での安全、自由とは何か (2)	
自分は何をすべきだろうか (2)	
嫌だな、怖いな、かわいそうだな等 (8)	自分 (10)
自分は今後どう思考や行動すべきだろうか (2)	
看護師はなぜこのような行動をとるのだろうか (4)	看護師 (4)
家族は抑制についてどう思っているのか (1)	家族 (1)
他学生は抑制についてどう思っているのか (1)	他学生 (1)

問いの編集のテーマ分析の結果では、全16事例中、251の問いの編集の語りがあった。12の問いの編集のテーマ、32のサブテーマに類型化された。問いの編集のテーマは、【この患者を知ろうとする】、【この患者にとっての抑制の意味を考える】、【抑制について知識を得る】、【授業での学びを通し抑制について考える】、【その病棟における抑制について観察する】、【看護師の行動に意見を持つ】、【自分の考えを周囲に相談する】、【家族の抑制への思いについて知ろうとする】、【抑制しながらも快適に過ごせるよう工夫する】、【抑制は外せるのではないかと模索する】、【自分の行動を振り返り内省する】、【学びを今後活かそうとする】であった。

構造分析では、問いの展開の4要素（問い、問いの編集、問いの編集後の捉え、帰着）を用い、問いのテーマ分析の結果に沿って全16事例の問いの展開の構造を明らかにした。結果、問いの展開の全体の構造図が示された（図1）。

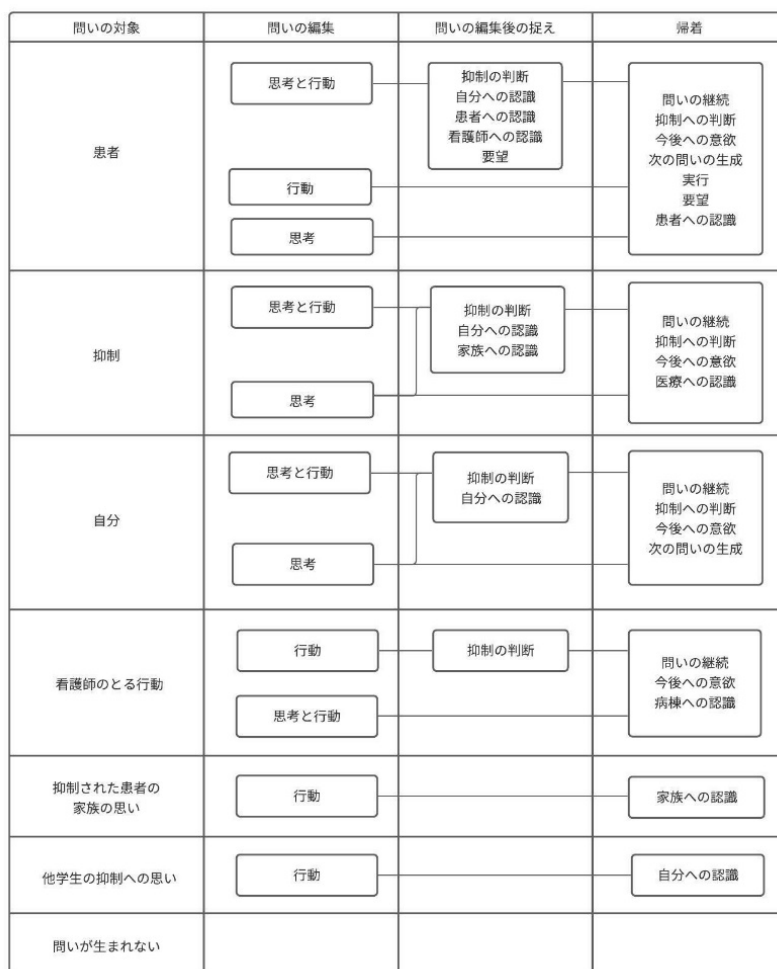


図1. 全16事例からみた問いの展開の全体の構造

また、実習前の授業から問いの素地はつくられ、問いの編集は主に実習中に行われ、実習後も問いが展開した。看護学生の問いの編集は、様々な2極の視点で編集されていた。結果から、看護学生の身体抑制への問いの展開は実習を主として問いが展開し、実習後にも問いは展開する。実習後に問いが展開する経験として、実習中の強い感情の揺れ、実習後に家族が入院し抑制をされているところを見た経験、実習後の看護倫理の授業を受講することであった。

更に、1-2年次における実習前の授業から既に問いの素地はつくられ、問いが生まれていることもあり、それが実習中の問いの展開に繋がっていることも明らかとなった。看護学生の倫理的課題への先行研究の多くが、倫理的課題をどう見分けるかに限られていること、調査期間が実習に限定されていることを鑑みると、本研究の1-2年次から卒業直前に及ぶ4年間を通じた看護学士課程の経験の中で看護学生の問いは生まれ、問いが展開しているという結果は新しい知見と言える。一方で、問いの編集では、学士課程4年間の影響だけでなく、入学前の自身の抑制経験を思い出す、学外での家族の抑制経験等があり、インタビューを行った卒業時まで問いの編集が行われていた。

問いの展開が実習後も継続する経験は上記の通りであるが、必ずしもすべての学生が強い感情の揺れ、家族の抑制された経験は行うことができない。しかしながら、実習を終了した4年生後学期の看護倫理の授業は、今までの全ての実習経験で遭遇した倫理的課題を振り返り、再度思考できる機会と言える。看護倫理の求められる場面の大半は、看護実践の中に存在する(和泉,2005)ことから、臨地実習をすべて終えた時期に看護倫理を受講することは理に適う。しかし、看護倫理を開講する大学で、4年生に開講している機関は26%であり、最も多い開講学年は2年生(30%)であった(鶴若ら,2013)。問いの展開が4年間を通して繰り返られるという結果、また看護学を学ぶ者としての倫理的姿勢が求められる前述の考察は、1年次から4年次までの継続的な倫理教育を必要とする。先ほどの鶴若ら(2013)の文献で、看護倫理を複数年行っている大学は2%であった。また、その内容が、倫理的問題あるいは課題を解決するための方法論またはモデルや事例検討に焦点がおかれていることから、各教育機関に看護倫理の科

目は任されている現状がある。しかしながら、本研究の結果や考察から、看護倫理という科目が独立するのではなく、倫理教育自体が看護基礎教育カリキュラム全体に浸透されたあり方が求められると考える。倫理的感受性プログラムは複数回にわたるカリキュラムへのシームレスな内容の検討が必要と考え、各教育機関では、看護基礎教育課程のどこかに看護倫理を科目立てするのではなく、全ての科目に倫理教育が浸透するよう、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーにそのことを明言し、各科目のシラバスに学修目標として表されることが求められる。看護を担う次世代の看護師育成に無くてはならない要素として、4年間の看護学士課程のカリキュラムに存在する必要性が示唆された。

Kim WJ, Park JH. (2019) The effects of debate-based ethics education on the moral sensitivity and judgment of nursing students: A quasi-experimental study. *Nurse education today*. 2019;83:104200.

小西恵美子、和泉成子(2006): 患者からみた「よい看護師」: その探求と意義、*生命倫理*、16(1)、46-51.

Riessman, CK. 大久保功子, 宮坂道夫訳.(2014). *人間科学のためのナラティブ研究法 Narrative Methods for the Human Sciences*. クオリティケア. 東京.

鶴若麻理, 川上祐美. (2013). シラバスからみる看護学士課程の「看護倫理」教育. *日本看護倫理学会誌*, 5(1), 71-75. https://doi.org/10.32275/jjne.5.1_71

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Tanaka Maki	4. 巻 30(3)
2. 論文標題 Exploring the Ethics of Physical Restraints: Students' Questioning	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Nursing Ethics	6. 最初と最後の頁 408-422
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/09697330221143149	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 田中真木	4. 巻 43
2. 論文標題 身体抑制に遭遇した看護学生の問いの編集：ナラティブ分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本看護科学学会誌	6. 最初と最後の頁 225-233
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5630/jans.43.225	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中 真木、小西 恵美子	4. 巻 13
2. 論文標題 「よい看護師」が患者に向き合う姿勢：がん患者の生の声に光をあてて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本看護倫理学会誌	6. 最初と最後の頁 51-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32275/jjne.20005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tanaka Maki、Tezuka Sonoe	4. 巻 2021
2. 論文標題 A scoping review of alternative methods of delivering ethics education in nursing	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Nursing Open	6. 最初と最後の頁 2572-2585
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/nop2.987	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Tanaka Maki	4. 巻 6
2. 論文標題 Thoughts and feelings that determine how Japanese nursing students deal with ethical issues: A qualitative study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Ethics Education	6. 最初と最後の頁 323-337
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s40889-021-00127-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tanaka Maki	4. 巻 57(3)
2. 論文標題 Orem's nursing self care deficit theory: A theoretical analysis focusing on its philosophical and sociological foundation	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Nursing Forum	6. 最初と最後の頁 480-485
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/nuf.12696	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 田中真木
2. 発表標題 倫理教育におけるScoping reviewからの一考察
3. 学会等名 第14回看護教育研究学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Maki Tanaka
2. 発表標題 A Scoping Review: Web-Based Learning for Ethics Education
3. 学会等名 The 40th Annual Conference of Japan Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Maki Tanaka
2. 発表標題 Critical Thinking on Physical Restraint in Nursing Students
3. 学会等名 ICN Congress, Montreal, Canada (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中真木
2. 発表標題 カナダ看護師協会の倫理綱領からみたEquity(公平)への提言
3. 学会等名 日本看護倫理学会第16回年次大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	秋山 剛 (Akiyama Takeshi) (20579817)	長野県看護大学・看護学部・准教授 (23601)	
研究分担者	伊藤 祐紀子 (Ito Yukiko) (50295911)	長野県看護大学・看護学部・教授 (23601)	
研究分担者	金子 さゆり (Kaneko Sayuri) (50463774)	宮城大学・看護学群・教授 (21301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	多賀谷 昭 (Tagaya Akira) (70117951)	長野県看護大学・看護学部・名誉教授 (23601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関